

令和元年12月5日

清水町議会議長 加 来 良 明 様

清水町議会厚生文教常任委員会
委員長 高 橋 政 悦

所 管 事 務 調 査 に つ い て

常任委員会活動として行う所管事務調査について、このたび調査を終えたので、その結果を下記のとおり報告いたします。

記

1. 調査事項 高等学校振興に対する支援策について
2. 調査期日 令和元年7月31日、10月21日
11月5日～6日、11月29日
3. 調査先 清水高等学校振興会
札幌新陽高等学校、北海道科学大学高等学校

4. 調査の結果

高等学校振興に対する支援策について、入学者確保等に向けた現状と課題を探るために、清水高等学校振興会と意見交換を行い、更に、札幌市内の私立高校である札幌新陽高等学校と北海道科学大学高等学校に伺い、入学者募集の取り組みや教育理念、学校運営の新たな取り組みなどについて調査（事前・事後研修を含む）を実施した。

【清水高等学校振興会】

清水高等学校振興会から、活動の状況と課題について伺った。

同振興会は、清水高校が平成9年4月に総合学科に転換されることに伴い、将来とも魅力ある学校であるよう各種支援活動を行うことを目的に平成8年6月に設立され、清水町からの補助金を受けてこれまで活動を行ってきた。

今年度の総会においては、新たな時代に向け、学校と地域の協働の在り方をより具体的にするため、規約の変更が行われ、この活動に賛同する関係団体や企業及び個人を含めて組織することとし、広く入会を呼びかけ、清水高校を支援する地域の広がりや連携を強め、地域人材を育成する機運を高めることとしている。

清水高校への入学者は、4間口160名の募集定員に対し、平成30年度の入学者は97名、今年度は107名と2年連続で募集定員を割り込んでいる。

平成30年度清水高校入学者97名の出身地別内訳では、清水町内の中学卒業生77名のうち35名、新得町内の卒業生42名のうち4名、芽室町内の卒業生215名のうち25名、帯広市内から30名、学区外から3名となっている。

今年度清水高校入学者107名の出身地別内訳では、清水町内の中学卒業生72名のうち32名、新得町内の卒業生45名のうち6名、芽室町内の卒業生225名のうち24名、帯広市内から34名、音更町内から2名、学区外から9名となっている。

清水高校の定員割れの主な要因は、帯広市内の私立高校の一部が定員を上回る入学者を受け入れていること、さらに国や道の私立高等学校生への授業料負担軽減制度の拡充などにより、自己負担が減少しており、市内をはじめ町外から交通費と時間をかけて清水高校へ入学する生徒が減ったことが大きい。

そうした状況であるが、振興会としては十勝管内をはじめ釧路まで学校訪問や学校説明会等を多数開催し、清水高校の魅力を伝える活動に取り組んでいる。

また、全生徒を対象に卒業後の進路実現を支援する活動として、

資格取得検定料・模擬試験の一部補助など、進学・就職に有利となる資格取得、大学進学への実力を試す模擬試験を積極的にチャレンジしてもらうことを応援する活動を行っている。その他、進学講習テキスト代・インターネット進路講習受講費用補助、進路開拓、総合学科通信・学校案内の製作支援など、清水高校の様々な活動を振興会がサポートしている。

さらに、清水町国際交流協会が実施しているアメリカのチェルシーへの高校生派遣事業への旅費の補助を行うとともに、インターネット進路講習への支援として、大学進学等を目指す生徒が受講する「スタディサプリ」の年間受講料の補助のほか、タブレットも整備し、進学や公務員試験対策などに役立てられている。

【札幌新陽高等学校】

学校長から学校運営等について説明を受けた。「日本一に本気で挑戦する人の母校」をスローガンに掲げ、「自ら考え、体験し、実践する教育」を目指している。

高校への進学先の選択権は、本人ではなく母親にある家庭が最も多いという実情があり、ニーズとして偏差値を高めるカリキュラムが求められているとのことである。学力を問わずに本気で挑戦しようとする生徒にターゲットを絞っており、入試については2020年度からペーパーテストをやめ、ディスカッションの評価上位者から合格するような仕組みに変えている。

教育の特色としては、これから求められる課題発見・課題解決力を身につける探求型授業を取り入れるなど、従来とは違った学び方を取り入れ、今後大学受験の主流になると言われるAO・推薦入試へ対応した教育を先取りして進めている。また、ICT教育に積極的に取り組み、授業や家庭学習に活用するため入学者全員にノートパソコンを無償配布している。

少子高齢化が進む中では、発想力豊かな人材が求められており、偏差値重視から経験値を重視した取り組みをいち早く展開することで人気校へ改革し、入学者を増やしている。

【北海道科学大学高等学校】

学校長から学校運営等について説明を受けた。北海道科学大学(前北海道工業大学)の系列校であり、教育目標としては、大学系列による科学の基礎的知識を身につけた多様な人材を育てる学校、生徒の主体性を育て挑戦する場を与え続ける学校、高等教育に直接触れる体験を通じて、生徒が広く社会に目を向けて自己実現を図る学校を目指している。

高校と大学の接続連携プログラムを前面に打ち出し、進路あるいは将来的な職業に対してビジョンを持っている生徒をターゲットとしている。私立校ならではの系列大学への進学に向けた特典や特待生制度を活用するなど、生徒募集には相当の努力を要しているとのことである。

教育の特色としては、普通科には特別進学コースと進学コースを設け、自主的な放課後学習の場を提供する「塾」を開設している。生徒たちの自主的な成長を促すことに重点を置いており、今まで使っていた「指導」という言葉をやめて「支援」に変更している。ICTを活用した授業を展開し、iPadを貸与(通信料等は保護者が負担)し、事前に授業の映像で予習することを前提とした「反転授業」も進めている。また、海外研修制度が充実しており、留学費用が全部又は一部免除になるものについては定員が定められており、応募者の中からプレゼンテーションで選抜されている。

部活動も盛んで9種目で全国大会へ出場している。部活動の中で、負ける経験を大切にし、負けることを乗り越える力を学習や今後の人生においての糧にしてほしいと考えている。最近、特進クラスの生徒には部活動を制限する学校が増えている中、教科の学力だけでなく人間的な成長を重視し文武両道を目指している。

【総括】

私立高校は、既に全国的に進行している少子化への影響を受けており経営改革に取り組んでいるところであるが、今後公立高校が直面する課題でもあるので参考になる点が多かった。

町としては現在、人口減少対策・地方創生の取り組みを推進しており、子育て世帯の定住を進めるためには、小学校をはじめ、高校までの教育機関の確保は大きな要素である。公立高校は私立高校とは違って独自に取り組めることが限られているが、町全体の課題と捉え、以下の3点について検討をされたい。

1つ目は、清水高校の総合学科としての魅力をどうアピールしていくかという点。5つの系列や進路チャレンジクラス等の詳細な内容、部活動、スイーツやパン作り等の実績を中学生へはもちろんのこと、保護者にも高校の魅力が分かりやすく伝わることが重要である。そのためには、広告代理店を利用するなどパンフレットの充実が必要であると考えます。

2つ目として、募集活動をする際、ターゲットをどこに絞るかという点。振興会としては学校訪問や学校説明会等を多数開催され、相当の努力をされているところであるが、そのほかに、少人数の母親等を対象にした説明会や座談会等が可能かどうか一考に値するのではと考える。

3つ目は、保護者がぜひ3年間子どもを預けたいと思うような教育カリキュラムの充実であり、その1つがICT教育の充実である。視察先の2校ともノートパソコンやiPadが生徒一人ひとりに配布されており、ICT教育を積極的に取り入れている。

また、今後生徒数が減っていく中でコミュニケーション能力をつけるために、学内の交流にとどまらず、十勝管外の高校の生徒間の交流を促すことも必要であると考えます。

さらに、海外留学制度の一定枠を設けることも生徒のやる気を引き出す要素になりえるのではと考える。

最後に、少子化による中学卒業者が減少し、帯広市内を除く公立校では芽室高校を除き、全ての町村で募集定員に満たない状況とな

っている。さらには国の公的負担軽減制度の拡充により、私立高等学校授業料等の納付金は公立高校と同程度となるなど、町外からの入学者が多い清水高校を取り巻く環境は今後ますます厳しい状況となる。

以上のことから、地元の中学卒業者が、地元の高校に入学し、将来の夢を実現できるよう、また、清水高校に入学してよかったと思えるよう魅力を高める取り組みを、引き続き、関係機関が協力して取り組まれることを期待し所管事務調査の報告とする。